

平成30年度石川県立九谷焼技術研修所運営委員会

次 第

日 時 平成30年11月21日(水)午後1時30分より
場 所 九谷焼技術研修所1階 会議室

1 開 会

2 挨拶

3 報告事項

(1) 研修の状況について

(2) 平成30年度事業の実施状況について

(3) 2019年度事業(案)について

(4) 九谷焼技術センターの事業報告

4 意見交換

5 閉 会

九谷焼技術研修所運営委員会委員名簿

委嘱期間 平成29年9月24日から

平成31年9月23日まで

氏名	役職名等
吉田 美統	(公財)九谷焼振興協会理事長、陶芸家
水野 一郎	金沢工業大学教授
大場 久子	クラフトAギャラリー プロデューサー
横山 真紀	横山真紀デザイン室 アートディレクター
新滝 祥子	(有)ゆのくにの森 取締役社長室長
井出 幸子	陶芸家、伝統工芸士会女性部会長
吉田 正一	石川県九谷陶磁器商工業協同組合連合会理事長
藤原 励	(公財)石川県デザインセンター専務理事
東 由紀子	能美市婦人団体協議会会長
和田 慎司	小松市長
井出 敏朗	能美市長
二木 裕子	石川県博物館協議会理事、小松市立博物館長

平成30年度 運営委員会（11月21日）議事録

12名中9名出席2名欠席

1 所長あいさつ

- ・今年度、今後の予定について

2 議長選出

- ・吉田 正一委員を選出、以降進行は議長による

3 報告事項

(1) 研修の状況について（藤原課長から説明）

ア 進路について

イ 入学状況について

ウ カリキュラム

- ・本科1年（造形、加飾の基礎修得）
- ・本科2年（一貫制作を基本とした課題、業界講座、企業研修）
- ・研究科（自主研究、技術習熟、企業研修）
- ・実習科（（加飾）二年間ですべての技法を履修（造形）型打ちなど）

(2) 平成30年度事業の実施状況（藤原課長から説明）

九谷焼技術研修所

ア デザイン支援事業（卒業生、若手後継者への支援）

イ 公開講座

夏期講座「金花詰の判子技術」（業界からの要望をもとに実施）

開放講座「九谷焼上絵付入門講座」（一般向け、県民大学校）

出張上絵付講座（高校美術部向け、高校へ訪問し開催するもの）

ウ 海外高校生（台湾明道中学校）の上絵付体験

エ 作品展の開催（ギャラリー彩、能美市役所、浅蔵五十吉美術館、クラフトA、
金沢勤労者プラザ、いしかわ動物園、しいのき迎賓館 全9回）

オ 普及啓発

オープンキャンパス、卒業制作図録の制作、研修所通信の発行

カ 所外研修

キ 研修生、卒業生の公募展への出品

ク 業界講座の開催

ケ 九谷焼干支飾皿の制作依頼

九谷焼技術者自立支援工房

藤原課長から説明

- ア ホームページでの情報発信（作家紹介、展示会情報の更新）
- イ 利用状況（工房利用…窯利用は横ばい、ロクロ利用など制作における利用者が増、見学者数…上半期は前年比で 1.1 倍）

九谷焼技術センター

笠森センター長から説明

- ア 研究事業（鋳込み用白色坏土開発、九谷焼用絵の具材料に関する研究）
- イ 技術指導（次世代産業育成講座「九谷焼の良さを伝える 御手洗照子」1回
モノづくり百工塾（伝統産業のための3D技術）…4回
九谷焼製造技術研究会…5回
- ウ 試験・計測業務（新規設備 化学組成分析装置）
- エ 技術普及（成果普及、講師派遣）

（3）平成 31 年度事業(案)について

藤原課長から説明

4 報告事案についての意見、意見交換

（1）「カリキュラムについて」

松島所長 今年、各科におけるカリキュラム内容の目的を明確化するため、委員のお手元にあるロードマップを作成した。大枠では技術力の向上を目的としたもの、創造力を強化する目的のものに分れる。12年前の「自治ジャーナル」の投稿の中に、九谷焼業界の課題として①九谷焼という知名度への依存、②販売チャンネルの新規開拓が無い、③新商品開発に対する意欲が乏しい、とあった。現在もこの問題はある。そういった中で、研修生には反復性の高い技術を身に付けていくことと同時に、自ら考え創造する力も身に付けること。この両輪は、カリキュラムの内容として大切であると思っている。

吉田正一委員

業界としては、やはり技術力を持った人材が必要。京都の訓練校はその点がしっかりしている。一日中同じ作業基礎ができないと先に進めない。技術の習熟度に対して厳しい。研修所は色々な事を勉強するから、技術の習熟度合いに対して甘い印象がある。基礎の達成度の見極めを厳しくしてはどうか。

大場委員 そもそも、2年という短い期間で即戦力となる技術を身に付けるのは可能か？

藤原課長 特に本科は、初心者が主。2年間で色々やっていく中で自分のやりたい専門が見つかり、以降にそれを深めていく、というのが多数。

井手幸子委員

2年で技術を身に付けるのは無理。10年でも難しい。学校という場では何が自分に合っているか探すのでは？

大場委員

卒業後の活動につながる何かをつかむ、それを目指していく意気込みを育てて欲しい。九谷焼の業界にも、魅力があれば自然に人は残る。

吉田美統委員

即戦力を求めること自体、難しいこと。技術は反復の訓練が必要。反復練習の授業はあるか？

藤原課長

多くはないが、ロクロ技術など集中して取り組んでいる。

吉田美統委員

昔は商品がたくさん売れたので、仕事の中で反復する訓練もできた。今でも、そういう所へ就職できれば技術も磨かれる。

(2) 「研修生の進路について」

松島所長

個人で発表などもしていくようになるが、最終的にはそれで収入を得ていかなければならない。売り場が必要。そういった意味でも、業界との交流が必須。

井手幸子委員

技術も大切だが、結局は人とのつながりで仕事がまわっていく。人のつながりを作るのも研修所の役割なのでは。

水野委員

建築学科の学生の場合、入学時には8割が設計（デザイン）の仕事を狙っている。だが、卒業時に実際設計の仕事に入っていくのはそのうちの2割。在学中の4年間で自分の適性を見極めていく。生徒の進路決定において大きい影響を与えるのは、実際は授業やカリキュラムの中からではなく、インフォーマルな現場で出会った人や経験から得る瞬間のインパクトであることが多い。学生時代に誰と出会い、接するかが大切で、そういう場を作れると良い。

吉田正一委員

研修生と連合会の組織との関わりが少ない。組合からの連絡（たとえば新規事業や展示会の案内など）を取れるようなネットワークが作れない。関係をどう作っていくのか課題。

(3) 「志願者の獲得について」

井手市長 研修生の定員割れに関する分析、対応はしているか。

藤原課長 募集人数に対して志願者は多く来ているが、入所試験の際に不合格となり定員割れとなっている。

松島所長 県外高校へのPR、進学相談会、オープンキャンパスの開催、ホームページの充実など研修所の認知度を上げる努力はしている。

井手市長 研修所のPRだけでなく、将来こういう仕事ができる、というビジョンをみせることも大事。九谷焼に憧れを持たせる、魅力を伝えることによって志願者も増えるのでは。

横山委員 デザインの業界はAIなどデジタル分野が大きく進歩していて、コンピューターで何でもできてしまう。一方で、手では何もできない、一本の線も上手に描けない、という人も出てきている。

こういう時代の中で、「手で作る」ことが逆に重要になってくる。手仕事に対するリスペクトは増していく。「手で作ることの意味」をもっとPRしていかれると思う。

(4) 「九谷焼について」

水野委員 工芸の中で、今は加飾の流れが来ている。建築の中でも注目されている。九谷焼の装飾性は非常に魅力的な分野。しかし九谷焼を主張しすぎて視野を狭くしてしまうと、外から見るとつまらなく見える。

産地や地域内の位置づけから九谷焼を語るのではなく「やきものの加飾文化、その代表が九谷だ！」というくらい大きな視点を持つといい。

(5) 「産学連携について」

横山委員 金城短大でも教えているが、産学連携の取り組みが浸透していて、10年前と比べてもはや当たり前前の状況。企業からのニーズもある。研修所でもそういった取り組みがあればよいのではないかな。

(6) 「台湾からの修学旅行体験受け入れについて」

新滝委員 台湾からの九谷焼体験の受け入れについて、良い取り組み。

台湾では、九谷焼を持っていても、それが「九谷焼」だと認識していない。草の根ではあるが、学生たちが体験を通じて九谷焼に触れるのは重要。海外の旅行者の工芸体験のニーズは多い。インスタグラムなどを使って、世界に発信していけば、マーケットが広がっていく可能性がある。